

#### IV 研究の考察

本校は道内2校のみの病弱教育単独の特別支援学校であり、その専門性が広く求められている。しかし、小学部から高等部まで、準ずる教育、知的代替の教育課程、自立活動を主とする教育課程と児童生徒の教育のニーズは幅広く、各教科や自立活動を指導・支援する力、発達段階に関する知識など教員には高い専門性が求められている。

H27年度の校内研究、指導内容表作成の取り組みは、学習指導要領に基づいた指導内容をまとめることができ、各教科等で何を学ばせたらよいのかを整理することができた。H28年度からの校内研究では、児童生徒の卒業後、将来の姿を思い描き、本校の学校教育目標を達成するために各学部段階で、どのような力を育てたらよいのかを整理し、育てたい力を表にまとめることができた。「育てたい力」をどの教科等で学ばせたら良いのかを考える機会を設け、共通理解することができた。さらに、本校病弱教育の専門性とは何かを整理し、その専門性を高めるために実践に取り組んできた。これらの取り組みにより、研究主題「病弱教育における児童生徒一人一人の実態に即した指導・実践の集積～病弱教育の充実を目指して～」に繋げることができたのではないかと考えている。また、本校教育活動における課題も整理することができた。

H28年度  
仮説検証

##### 1 H28年度研究仮説の検証

H28年度の校内研究仮説

(1) 指導内容表を活用することにより、以下、ア、イ、ウを実現できるのではないか。

ア 本校の児童生徒一人一人の実態に即した指導ができ、各類型における必要な力を身に付けさせることができるようになるのではないか。

イ 本校児童生徒に必要な特別な配慮や留意事項を授業や指導に活かせるのではないか。

ウ 教員の経験値などにより、指導内容が変わるのではなく、各教科で系統立てた学習内容の設定をすることができるのではないだろうか。

(2) 学校教育目標から育てたい力を具体化し、共通理解した上で指導実践に取り組むことにより、病弱特別支援学校の児童生徒に本当に必要な力を育てることができるのではないか。さらに本校病弱教育に関する専門性の維持・継承に努めることにつながるのではないか。

##### (1) 指導内容表の活用について

指導内容表を活用し、授業研究・年間指導計画作成に取り組んだ。校内研究成果と課題から、指導内容表の特別な配慮や留意事項を授業づくり・指導にどのように活用できるのかを理解することができた。一人一人の実態に即した授業・指導については、指導内容表と児童生徒一人一人の実態を照らし合わせ、活かせるところは

活かすなどの取組がみられたが、指導内容表の内容が実態に合わなく、活用できない教科等もあった。しかし、経験の浅い教員が各教科を担当する際に指導内容表を参考に年間指導計画を作成し、授業に取り組むことができていたことは一定の成果といえる。今後も児童生徒の実態に合っている部分は、指導内容表を活用して年間指導計画を作成できれば、各教科等系統立てた内容が学習でき、学習の積み上げができると考える。また、一人一人の実態に即した指導については、実態を客観的に把握するためのツールがないことが研究課題として上がっている。

## (2) 育てたい力を意識した指導

学校教育目標から育てたい力を具体化することは、本校の児童生徒に必要な力を明確化することにつながったと考えている。授業研究の成果と課題から教員の授業づくりの意識が変わったこと、指導の重点を明確にすることができたこと、1つの授業だけではなく複数の授業で同じ視点を持ち指導に向かうことができたこと、教員の共通理解が図りやすいことが成果としてあげられる。このことから、育てたい力を意識した指導は児童生徒に必要な力を身に付けさせるために有効だったと考える。また、本校の特色ある教育が育てたい力作成により、具体化することができ、本校病弱良教育に関する専門性の継承につながったのではないかと考えている。

H29 年度  
仮説検証

## 2 H29 年度の校内研究仮説の検証

病弱教育の専門性を明らかにし、共通理解し、その専門性を高めることにより、「児童生徒一人一人の実態に即した指導・実践」につながるのではないかと考えている。

病弱教育の専門性については、これまで教員間の共通理解を図ることができず、学校として明確化されていない現状があったが、病弱教育の専門性、指導・支援方法の項目を分類、整理することにより、本校教員に求められる力を明確化することができた。また、病弱教育の専門性グループに分かれた研究は、研究が十分な検証に至らなかったグループもあるが、教員の興味の方向性や得意に基づき研究を進めたため、質の高い内容にまとめることができたと考えている。各グループ研究仮説を立て、指導実践に取り組むことにより、多くの成果が得られた。このことから、「児童生徒一人一人の実態に即した指導・実践」に努めるためにも、学校全体の教育の質、病弱教育の専門性を持った指導・実践が必要であることがわかった。

2 力年  
研究成果

## 3 2 力年校内研究の成果

校内研究、成果と課題から、本校教育活動に必要な視点を整理することができた。病弱教育における指導・実践に必要な視点として研究の成果を活用することにより、児童生徒一人一人の実態に即した指導・実践ができるものとする。

### 指導・実践のために必要な視点

・各学部の卒業時から将来の姿を、全学部、類型の教員が共通理解して指導・実践に取り組むこと。(育てたい力の表を参照)

- ・実態把握は、行動観察だけではなく、客観的なデータを基に実態把握を行い、指導・実践に取り組む必要があることを押さえる。(運動面『ボディダイナミクス』、『MEPA-Ⅱ』、認知面『新版K式発達検査』、『学習到達度チェックリスト』など)
- ・育てたい力を、どこで(どの学部で)、どのように教えるのか。教科横断的な視点を持ち各学部段階で縦のつながりを考え継続的に指導・実践に取り組むこと。
- ・育てたい力を意識しながらも、各教科の学習指導要領、目標を基にした指導内容、年間計画を立てること。(指導内容表、育てたい力を参照に、指導計画をたてる)
- ・児童生徒に合った配慮、段階的な支援を考えながら、学習環境の整備・支援機器等の選択、工夫をすること。
- ・病気(病気の進行)、障害、心のケアに配慮した指導、指導計画を立てること。(指導内容表の配慮事項、グループ研究を参照)
- ・病弱教育専門性グループの研究成果を維持・継承すること。本校独自の病弱教育の専門性を教育活動に反映させ、その専門性を高めていくこと。

#### 4 今後の課題

校内研究課題から、今後のさらなる取り組みが必要なことを以下にまとめる。

- ・指導内容表を活用する。(新学習指導要領に対応するために内容の整理・精選・追加が必要)
- ・育てたい力と各教科の目標を関連させた授業づくりをする。
- ・教科横断的な学びの充実のために、教科間のつながりを大切にする。獲得した「知識・技術」や「思考力・判断力・表現力」を日常生活の中で活用できるように指導・支援方法を追究する。
- ・各学部のつながりを持った教育活動を大切にする。
- ・キャリア発達を促す教育について共通理解と実践を進める。
- ・神経筋疾患の児童生徒については進行性の病気であることを教員が強く意識する。
- ・主体的で対話的で深い学びの実現のために、指導形態を工夫し、集団を確保する。
- ・本校における客観的な実態把握のツールを模索する。
- ・根拠となる評価方法を確立する。

2カ年による校内研究の成果と課題に加え、今後は、新学習指導要領を基にした指導・実践の取り組みが求められる。これまでの教育活動については、2カ年の校内研究で整理することができたと考えている。これまでの教育実践に加え、「社会に開かれた教育課程」、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」、「カリキュラムマネジメントの確立」を実現するために、さらなる取り組みが必要であると考え。病弱教育における児童生徒に本当に必要な力を育むための教育活動の実践を維持・継承していくことが本校に求められている。